

作物名：キャベツ

病害虫名：コナガ（学名：*Plutella xylostella*）



幼虫



蛹



成虫

1 被害の特徴と診断のポイント

- ・キャベツをはじめ、アブラナ科野菜の重要害虫で、幼虫が葉を食害する。特に、定植後初期の苗の芯葉部が食害されると、被害が大きい。
- ・卵は葉表・葉裏に点々と産みつけられる。
- ・若齢幼虫は、葉肉内に潜入して表皮を残して食害する。2齢期以降の幼虫は、葉肉内から出て食害する。老齢幼虫の体長は、約10mmに達する。幼虫は触れると跳ねたり糸を吐いて葉から落下したりする習性がある。
- ・蛹は薄い繭で覆われている。

2 発生生態及び発生好適条件

- ・日本全国に分布する。その年の発生源は、主に暖地からの長距離飛来個体と考えられているが、本県では露地越冬も可能である。
- ・本県の主要キャベツ作型は、コナガ発生時期と重なるため被害が出やすく、県内では5～8月に多発しやすい傾向がある。
- ・卵から成虫羽化までの期間が短く（1世代の経過日数は、25℃で約15日）、休眠性がないため年間発生回数が多い。暖地では、年間10～12世代経過し、冬期でも発育する。
- ・少雨が発生に好適である。発生量には天敵も大きく影響している。

3 防除方法

(1) IPM 体系

- ・大麦リビングマルチと他の防除方法（定植前灌注処理、交信攪乱剤及びBT剤）を併用することで、化学合成農薬使用を半減できる。

(2) 耕種的防除

- ・ほ場周辺のアブラナ科雑草は発生源となるので除草に努める。
- ・収穫残さは次世代を増すことになるので、適切に処分する。

(3) 化学的防除

- ・育苗期から定植時までは、粒剤や薬液灌注により防除する。
- ・定植後は、防除効果が高い中齢幼虫までを対象に薬剤防除を行う。薬剤抵抗性が発達しやすく、既に防除効果が低下している剤もあるので、剤の選定に注意する。
- ・薬剤抵抗性の発達防止のため、同一作用機構分類に属する剤の連用を避け、計画的にローテーション散布を行う。
- ・薬液は、葉裏にもよくかかるよう散布する。
- ・同じチョウ目害虫の、モンシロチョウ、ウワバ類、ヨトウムシ類と同時防除できる。

4 出典

- (1) 参考文献：みやぎの野菜指導指針（宮城県）
農業総覧 病害虫防除・資材編3（農文協）
コナガおもしろ生態とかしこい防ぎ方（農文協）
- (2) 写真：宮城県病害虫防除所撮影

(2021年3月改訂)